

## 巻頭言

封筒には「1・2・算数」と題した学級通信が四つ折りで入っていた。五年生のクラスのものだという。学会の折に持参し、仙台から乗った新幹線で読み出し、終点の八戸で特急列車に乗り換えてからも読み続けた。弘前に着くまでに読み切れなかったのは、かなりな枚数（号数）あったからではあるが、吹き出しの形で記してある授業での返答から、子らの心象を思い、時々冬空の車窓にその像を結ぼうとしていたからでもある。

算数通信を作る教師の奮闘に感心しながらも、子供たちの答えや反省をほめ、上手に励ましているのに時代を感じ、自分は父兄の気持にはなれないのだと悟る。

通信はいろいろな感想も取り上げ、クラスの児童に読ませることをねらっているであろう。児童には復習に、また先生にとっては、そのまま授業記録になる。

分数の加減算がある。小数の掛け算の意味があり、少数の筆算に進むのに掛け算の「きまり」を教えている号と続く。大学院の学生になった教師たちを通じてわたしも知った「現代の」学校数学だ。そんな因縁もあって通読に難航したところがある。20年以上も前のことであるが、その頃の論文で新鮮に読んだことが、ストレートに授業の標的にされている。教育研究の成果が盛りだくさんな項目を作って教科書を賑わしているのであろう。

憶測を広げて通信を読み進むうちに、内容相互に関連の糸を紡げられないところがぼちぼちと増えて、抵抗感が何層かになって濃んでいった。

先生のセリフに「線分図で考えればいいですね」というのがある。「テープ図」を書いた学童の答えがほめられている。かつて見知った言葉が、子供には親しめない抽象の語に感じられる。乗法の交換法則を計算の「きまり」といって教えて、面積図で説明する。項目ごとに問題が変わるのも衰えて鈍くなった脳にはせわしく、物語展開の筋が読めない。針金の絵図を書かされれば「1センチの重さが2グラムの針金は、3センチの重さが6グラムです。3.5センチの重さは7グラムで、35センチの重さなら70グラムです」と答えられる。その算出には面積図は無用である。掛け算の意味も「きまり」も用がない。

車中で揺れ動いた思考が教科内容や教育方法の論から離れ、近ごろ気にしていたことに結びついたのは、弘前の学会発表から帰って三週間ほどしてからであった。

分類し分析して考案された教師向けの知恵は、用語を伴って教科書に浸透していく。新教科書は、親が算数で覚えたことをなぞり、数学の勉強を想うことから縁遠いものになる。算数通信に子も母親も執着しないから、わたしのところへ送ってきたのであろう。

教科書が、教師用指導書の匂いの染みていない児童の読み物になっていけば、親も懐かしさを込めて読むであろう。そういう算数テキストを無償配布の教科書で実現するのは難しいから、テキストは多様に編まれる副読本の一冊と考える。「現代の」クラスに合う子供に見合ったテキストで授業をすれば、学級通信を作る先生の努力精進は教本の改良に働き、子が親になったときには声に出して読む本になっているかもしれない。

板垣芳雄